



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第33主日 B年(2021年11月14日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ダニエル書 12章1—3節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 10章11—14、18節

福音朗読：マルコによる福音書 13章24—32節

テーマ：完成の時

【三つの朗読箇所から】

第一朗読の2節に「多くの者が地の塵の中の眠りから目覚める」とあります。これは、旧約聖書の中で死者の復活を明白に述べる最初の箇所です。この箇所はマカバイ戦争(紀元前167年～160年)の時代に書かれました。マカバイ戦争はセレウコス朝シリアへの叛乱ですが、特にシリアはゼウスの神を礼拝するようにと強要しました。異教の神を偶像礼拝するのを拒絶して死んでいった人々はいわば信仰に殉じた殉教者です。その彼らが死者のいる陰府に落ちたままでもいいのだろうかという疑問が人々に生じたのでしょう。そこから、死後のいのちについての再考察が生まれていきました。信仰を守り抜いた者には、復活と永遠の命が保障されているのです。復活の信仰をユダヤ人が受け入れるようになった背景にはこのように異教徒からの迫害がありました。死者が目を覚ました後で裁きが生じます。「永遠の生命に」入る人と、「恥と憎悪的」となる人に分けられます。

第二朗読の14節「唯一の献げ物」とは12節の「唯一のいけにえ」と同じことです。それはイエスさまご自身が十字架上で献げ物となったことを指します。「完全な者とする」は、ギリシア語原文ではテレイオーですが、「目的にまで到達させる、完了させる」の意味だそうです。それが『ヘブライ人の手紙』では祭儀的な意味合いを持たせて「聖別する、清める」へと発展します。ですから「聖なる者」(ハギアゼイン)とほぼ同義と理解してよいでしょう。大祭司キリストが一度限り自分自身を献げ物として献げたから、人と神は新しい関係に入ることができ、「聖なる、完全な」ものとなったのです。「完全な者となさった」(テレイオーケン)ですが、文法的には完了形です。完了形は現在までの継続も表しますので、キリストの犠牲においてすでに完成した贖罪の業が、現在も個々の信者に継続されているという意味合いがあります。

福音朗読は『マルコによる福音書』13章からですが、この章は「小黙示録」と呼ばれています。イエスさまは終わりの時を語っています。1—4節は、その導入となります。神殿の崩壊が預言されて、「これらのことはいつ起こるのですか」と弟子たちが問いかけます。5—23節では終わりの時に先だつ、苦難の数々、苦難の日々が説明され、その日のことをイエスさまは「気をつけていなさい」と呼びかけます。なぜなら偽預言者によってその時が惑わされるかもしれないからです。24—27節には、「人の子」が終わりの時に来るといふ事実と、選ばれた人が集められることが伝えられ、その時は近く、必ず来ると主張されます(28—31節)。しかし、その日を知るのは父なる神だけであり、他の誰も知らないから「目をさましていなさい」とイエスさまは励まし、論じます(32—37節)。

説教

第一朗読の最後に「大空の光のように輝き」(3節)とあります。死者の中から復活した人は光の源から光を受けて、その光を輝かし返します。光を受けて、光を生きるようになるのです。

第二朗読には「完全な者」(14節)とあります。完全な者とは神のいのちを生きるようになる者のことです。つまり光を生きる者です。

そして、福音朗読には「呼び集める」(26節)とあります。多くの人を御父から受けた光で輝かせ、完全な者とするためにキリストはわたしたちを終わりの時に呼び集めるのです。

終わりと聞くと破滅しか想像できませんが、終わりは完成の時です。完成の時にキリストがその中心にいます。

